

新井明著『ミルトンの世界—叙事詩性の軌跡』

(研究社出版 1980)

斎藤 康 代

日本におけるミルトン研究については、宮西光雄氏の「ミルトンと日本」(『ミルトン研究』, 17世紀英文学研究会編, 金星堂, 昭和49年)によって詳しく知る事が出来る。その中に、ミルトンの文学については、「文学的規準によって検討すべき局面」と、「宗教的規準で評価すべき局面」があり、前者は「坪内逍遙, 繁野天来, 夏目漱石, 上田敏」等、後者は、「岩橋武夫, 斎藤勇, 畔上賢造, 竹友藻風, 越智文雄, 平井正穂, 矢内原忠雄」等キリスト者の諸氏によって担当されたが、後者は前者より「はるかに優勢な指導的役割を演じた」こと、彼等の「ミルトン愛好の底面には、ミルトンと霊犀相通ずるキリスト教の信仰が根ざしていた」ことが詳述されている。本書の著者新井明氏は、内村鑑三奨学金によりアマースト大学に留学された経験を持ち、塚本虎二訳口語聖書の愛読者であり、前田護郎氏の愛弟子と拝察されるので、明らかに後者の峰に連なる研究者と言えよう。

著者は上記『ミルトン研究』に基本的な参考文献を23頁にわたって載せている。ここでは、その殆どどの文献にそれぞれ手際よい解説が記されていて、ミルトン研究を志す者に大きな助けとなっている。そこに窺える氏の博識が、縦横に駆使されて見事に結実したと思われるのが本書『ミルトンの世界』である。すでに滝澤正彦氏が「欧米のミルトン研究総覧の観がする」(『日本読書新聞』1980.5.5)と評しておられるように、その膨大な注にはただ驚嘆するばかりである。最も長い第8章は、本文56頁にたいして注の数は92、本文6頁の最短の章でも注が15付されている。これは氏の学識の広さと、滝澤氏の言う「学問的誠実さ」による事は勿論であるが、ここに、キリスト者の在り方のひとつが示されているように思う。即ち、被造物なる人間は、創造主によって完成される時を待ちつつ、何事に於ても極めようと努力する姿勢である。氏の30年に近い御研究の集大成を前にして、これを評する事は、浅学の筆者には至難の業なので、「日本のミルトン研究の達成を誇りうる業績」(道家弘一郎氏「新刊書架」『英語青年』1980.6.)として章を追って紹介させていただく。

本書の意図は、「はじめに」に示されているように、ミルトンが「叙事詩を口述するにいたるまでに、いかなる過程を経ているのか」、詩人自身の内部において「叙事詩性」がどのような過程を経て形成されて来たかをたどろうとするものである。

先ず序章「叙事詩性について」の中に、イギリス・ルネサンス期における叙事詩観

が述べられている。第1に、古典叙事詩の模範とされるホメロスの作品に見られる「祭儀的吟唱性」が、ルネサンス期叙事詩に受けつがれ、それに似た特徴がみられること。第2に、叙事詩人は、彼の属する社会集団の「最高の価値——ときに神——の代言人」として、その集団の「範例」的人物を、愛国心をもってうたいあげるということ。第3に、叙事詩は当時、「貴族階級の子弟にたいする紳士教育を目的」としてつくられるものであったので、「美德」を示すことによって「人間教育に資することが期待された」ということ。第4に、叙事詩の素材は、吟唱者と聴衆が共有する「歴史的事件を踏まえた」ものであること。第5に、そのテーマは「探究の形式」即ち、試練の旅を経て、栄光の地に到達するという「戦う魂の遍歴」を主題とするものであること。第6に、叙事詩は時間的にも空間的にも、知識全体を「要約」するものでなければならないこと。第7に、その文体は「真剣な内容にふさわしい崇高な文体」であること。これらの特徴のいくつかは、ある作品に含まれている場合、それをその作品の「叙事詩性」と呼んでいる。

第1章「叙事詩性への開眼——教師トマス・ヤング」に於て、叙事詩性が詩人の内部でどの様にして「開眼」されたかを述べる。ミルトンが青少年期に、強い影響を受けた人物は家庭教師のトマス・ヤングと、聖ポール学校以来の親友チャールズ・ディオダティであった。ヤングは長老派の牧師であり、後にジーザス・カレッジの学寮長になるすぐれた人物であった。ミルトンはヤングを心から敬慕し、「王者の心をもつ」人物という賛辞を送っている。ミルトンに詩歌の世界を教えたのもこの師であり、「自覚的に叙事詩の制作を思いつきかけ」を与えたのも、ヤングの「プラトンの節制と勇気の生きかた」に関係があったようだ。ミルトンの叙事詩性は、19才の時初めて母国語で書いた『宿題として』という小品にすでに見られると言う。その「詩行にみられる堂々たる英雄対韻^{ヒロイック・カプレット}や、「より厳粛な主題」を求める真剣な息づかい」、結び10行にうたわれる河川の名前にみられる叙事詩的「カタログの技法」等から、この作品は後に叙事詩へと結実する「初穂」であるとしている。「貞潔と愛」をプラトンから学び、トマス・ヤングのなかに「プラトンの節制の徳の具現」を認めるケンブリッジ時代のミルトンの作品には、プラトンに対する深い関心と同時に、「プラトンの沈思」を「媒介」とするキリスト教的世界への遍歴がみられる。この遍歴は1629年、B. A. を取得した年の暮に書かれた「ヒロイックな詩」『キリスト降誕の朝に』に表現されていると言う。この作品に続く一時期は牧歌の時代と言われる時代である。第2章「牧歌の時代」ではこの時期の作品の背後に「叙事詩的な香りの痕跡」を検証する。先ずオードである『賛歌』は叙事詩性をうちに秘めた作品であると言う。その理由は、知識全体の世界が神の力に服するという形で「要約」を表すこと、詩人の想像力は「自然」「人間」「神々」の世界を経めぐり、最後に神の子誕生の場面にたどりつく「探究の形式」をとっていること、うたわれる中心人物がキリストという「範例的存在」であること、文体が「崇高な文体^{サブライム}」であること、異神の名を並べた叙事詩の「目録^{カタログ}の手法」もみられること、しかもミル

トンは神のこゝばを「代言」する立場を意識して書いているにちがいないこと等あげられる。『快活の人』と『沈思の人』に於ては、プロタゴニストが、田園から都市へ、更に塔へと遍歴し、最後に神との合一を願うという「範例」的人物であり、その遍歴が「探究の形式」をとっていること、内容が全知識の「要約」であること、文体的にも田園詩から叙事詩へ発展する「文学的伝統の型」が認められるとしている。仮面劇『コウマス』も＜淑女＞という「範例」的人物が「超越的実在者」の助けにより、試練を通して愛の世界に迎えられるという「探究の形式」にあてはめられる故に、叙事詩性を含んだ構図になっているとみる。また『リンダス』には、「牧歌からキリスト教的な叙事詩への傾斜」を認める。主役リンダスは＜水＞が完全に支配する世界を出発し、やがてその支配から脱して、やや高められた世界を通り、最後に＜水＞の支配を全く受けない世界へと上昇する。いわゆる「探究の形式」に則った教訓的「範例」の型がみられるし、作品が全知識の「要約」をなしていることも明らかである。使われているイギリスの地名により詩人のイギリス賛歌の心が言い表され、叙事詩のひとつの特徴である「愛国の心情」が漲っていることも指摘される。更に結び8行にルネサンス叙事詩の定形詩を用いている事に注目し、これは、当時文学類型上、最高位にあった叙事詩の韻律でしめくくることによって、友の死に対する限りない哀悼、称賛を表すためであったと説明する。この様に、ミルトンが叙事詩人を志したとみられる1628年頃に続く約10年間に書かれた作品のなかに「叙事詩的特性」が盛り込まれていることが示された。

第3章「アーサー王物語との訣別」で、やがて取りくむべき叙事詩の素材を探る。『教会統治の理由』の中で、ミルトンはアーサー王伝説への関心を示しているが、やがて、「アーサー王の歴史的信憑性」に疑惑をもち、当時はその歴史性が疑われることのなかった旧約聖書の「アダム物語」へと移って行く事情の背景を説明する。この「くら替え」については第4章「楽園脱出の原理」で詳しく述べられる。当時、叙事詩と悲劇は最高の文学形式とされていた。ミルトンはアダム物語をテーマに「五幕物のギリシア悲劇ふうの作品」を書く構想を持っていたが、それをやめて、叙事詩としてのアダム物語へと進む。その理由はミルトンの散文時代が『楽園の喪失』完成に対して持つ意義と深く関わることとして検証する。著者は特に、離婚論争に終始した1644年前後3年間を問題とする。彼の離婚論の特色は結婚を、「神と人との契約の具体的なかたちと把握した点」にある。しかも「個人の自律性」を重視し、そのうえに「自発的な契約関係」を求めるというものである。この「自律的契約思想」の把握と並んでこの時期を特徴づける点は、「正しき理性」をアリストテレス的理性観即ち、「道徳的行動の原理」として把握するようになったことである。ミルトンはこの「正しき理性」に立脚した「自由な論究の働き」を提唱し、「慣習」の楽園から「自然」へと脱出することを主張するにいたる。またこの期に至って、悪のなかから善を選びとる「道徳的一元論」の思考様式があらわれるが、ここに、「楽園追放のテーマが楽園脱出のテーマ」

にかわり、「悲劇としてのアダム物語でなく、叙事詩としてのアダム物語を書くことになる基盤」があると説明しているのは興味深い。

第5章「ヒロイズム観の実践」では『教育論』にみられるミルトンの教育観について述べる。彼の目指す「キリスト教的なヒロイズム観にもとづく人間形成」の問題を彼の言う「雅量」(“magnanimity”)の意味を探りながら展開させたものである。アリストテレスのいう「雅量」の徳は、人間そのものの偉大性の概念であるのに対し、ミルトンのそれは、「神の側からあたえられる尊厳」という神中心的概念であって、このことばは、「神的な高みを内容とするキリスト教的ヒロイズムをいいあらわすことば」と説明している。従って、神の義のためのヒロイックな人生こそ「雅量に富んだ生きかた」と考える。彼の教育観もこの線に沿うものであった。「完全な気高い教育」とは「課せられたつとめを雅量をもって果たしうる人物をつくりあげる教育」と考えた。そして青年教育の最終段階に文芸、特に「高い型」の詩文学による教育を置き、そこにあらわれる「ヒロイックな生き方」を教育の終局の目標として徹底させようとしたのである。また彼の教育観は、あくまで「実践性」を内容とするものであって、彼自身、「ヒロイックでなければならない」ことを願い、その様につとめたのであった。第6章「叙事詩人としての自覚」では、主にミルトンの「第二弁護論」の中に叙事詩的特色を探ろうとする。この論文は、1649年、チャールズ1世断罪を機に王党側と議会側の論議がたたかわされ、ミルトンへの攻撃が激しくなった折、それに対する反駁と自己弁護の為に書かれたものである。ここにみられるいくつかの特色の中にミルトンの叙事詩人としての自覚と気迫が感じられるとしている。即ち、この中に「イングランド国民の代表的人物を、子孫の範例のために」取りあげていること、イタリア旅行の記述に「ヒロイックな気概」が見られること、「行動する立場」の英雄クロムウェルと相似的に「叙述する立場」に自分をおいてヒロイックに描いていること等である。ところでこの「ヒロイック」とは「理性の声に従って節制の人生を送る」ことであり、神の声に従って生きる人格こそ真の英雄と考える。この意味で「第二弁護論」は真にヒロイックなあり方を称えた文書として、「文学的生涯にとって、まさに画期的な著述であった」ことが示される。

第7章「ヒロイズム観の修正」は「失明のソネット」論とも言えよう。ミルトンの叙事詩人への「大志」がどのように展開されたかを説明する中で、20年にわたる散文時代の持つ意味を詳述する。当時叙事詩は「教訓的意図」をもって書かれるのが一般的であったが、彼の散文作品の中にも、「範例」をもって教育しようとする意図がみられ、その「節例」は「叙事詩的英雄に比肩しうるもの」を意図していたことなどを見れば、散文作品も充分叙事詩的であると言う。しかしこの時代は、叙事詩をつくるという使命観がやがて成就する準備期間として、より大きな意味を持つ時期であり、「みずから真の詩となる」ことを目指した時代であった。1652年、失明及び妻と息子との死別という深刻な体験以後、順境時の「節制」の立場から、逆境時の「忍耐」重視の

立場へと変化しているが、「失明のソネット」はこの過渡期の作であって、「失明の苦難のなかで忍耐を勧める詩」であるとみる。当時ヒロイックな人物と考えられていたヨブにたいする関心がミルトン自身高まっており、ヨブ型のヒロイズムが「失明のソネット」によってはじめて作品化されたのである。このヒロイズムがその後の作品『楽園の回復』のキリスト及び『闘技士サムソン』のサムソンの人格形成の基調になっているとの指摘は興味深い。

第8章「アダムと救済史」では、人間の墜落と回復を主題とする『楽園の喪失』は契約の成就をめざす「救済史」との見地から、主に最後の2巻が作品全体に対して持つ意味を探る。これは神に遣わされた天使ミカエルがアダムとエバに語る人類の未来史であって、神との契約に立った人間の救済の歴史全体の「要約」とみている。ここでアダムは墜落を通して体験した救済への希望を「幸い」として自覚する。つまり、「絶望」と「希望」、「恐れ」と「慰め」とが分離せず「絶望と恐れのただなかから希望と喜びが生まれる」というミルトンの道徳的一元論が表現されている。アダムは伝統的叙事詩の英雄とは異なる。「神との契約にかたく立って、不安のなかにも希望をいだき、この世に出てゆく人間」である。再生の慰めを抱きつつ、「摂理」に従って歩み始めるアダムとエバの姿の中に、「叙事詩の歴史においてかつてない新しいヒロイズム」が具現されていると述べる。第9章「ヒロイズム観のゆくえ」には、1650年代なかばのミルトンが「逆境における忍耐」を発見し、節制中心の倫理観から忍耐中心の倫理観へと転換していくことが詳述される。この忍耐の徳は『楽園の喪失』の最後の部分に現われ、『楽園の回復』と『闘技士サムソン』に於て展開される。前者に於て、「雅量」と「説得」の誘惑にうち勝つ忍耐の人物像が描かれ、後者に於ては「忍耐と英雄的受難」が劇化されていると言う。『闘技士サムソン』は『その極限の状況における忍耐の意味を追求した作品』であり、神との契約関係を基盤として忍耐する者に心の平安と静けさが与えられると説明する。この神との契約関係に立つ者が体験する「激情の鎮撫」をカタルシスと解釈する点は特に注目したいところである。最後の三部作が「順境における節制のありかたから出発して、逆境における忍耐のありかたにいたる変遷」をうたうもので、「激情はすべて鎮めて」生きる晩年のミルトン自身の中に「キリスト教的な忍耐の典型」を見ると結んでいる。

尚、著者は、「むすび」の中で、ミルトンの生涯に起った決定的な3つの出来事、即ち「トマス・ヤングとの出あい」「メアリ・ポウエルとの結婚」「彼じしんの失明」と関連づけながら、「叙事詩性の軌跡」を見事に「デッサン」しているが、筆者は、筆者なりにミルトンの作品にみられる「叙事詩性」に重点を置いて要約をこころみた。従って、神学的哲学的論述には触れていない部分も多い。また、著者の語り口をも紹介すべく、本文から多く引用させていただいた。本書は決して読み易いものではないが詩人ミルトンとその作品の全貌を俯瞰するのに、最適な書と言えよう。